



TITLE:

京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所水族館月報 No. 149

AUTHOR(S):

CITATION:

京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所水族館月報 No. 149. 京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所水族館月報 1965, 149: 42-46

ISSUE DATE:

1965-02-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/186889>

RIGHT:

水族館月報

No. 149

1965年1月

1月の入場者数

一 般		団 体		有料合計	特別観覧
大 人	小 人	大 人	小 人		
55,596	3,124	6,243	0	64,963	143

前年度比	1964	1965	増 減
入場者数	57,138	64,963	+ 7,825

水族館記事

◎ 7日 H水槽のハマチ・カンパチに吸虫 *Benedenia* が再発した。

先月末に2度目のネグボン・硫酸銅浴を行なったさい、魚体に吸着していた成虫は完全に駆除できたが、地下貯水槽 R-M・Wの海水は処置しなかったため、そこに残っていた幼虫が、外式循環の再開とともに蔓延したらしい。

同種薬剤の反復使用により、虫体に抵抗性が生ずることを考え、今回は塩酸キニーネ (15PPm) を用い、水温を 23°C に上げてから、H・R-M・Wの各槽ごとに溶入した。

なお、地下貯水槽の入口は著しく狭く (50×50cm)、外からでは薬を一様に撒布することができないので、槽内の点検をかねて、潜水作業により薬剤を溶入した。3日後に吸虫は白化脱落し、月末現在魚体表の損傷も回復しているので、完全駆除ができたものと思われる。

◎ 16日 皇島南浜で夜間採集を行ない、久々にウミシャボテン6個体が入槽。

№3水槽に展示した。

- ◎ 17日 南浜防波堤東側の浅いタイド・プールで、夜間の干潮時にアヤマエビス（全長12cm）1個体を採集した。

これはおそらく、紀州沿岸では2番目の採集記録である。

低水温のため、弱って漂着したものらしく、予備水槽（水温12.8℃）に収容した直後は体の平衡を失い、角膜がやゝ白濁していた（これらは低温致死のさいに顕著な症状である）が、保温水槽に移してから徐々に回復し、月末には餌につき角膜の白濁も完治した。

- ◎ 18日 雑賀崎1本釣漁師よりアカヤガラ（全長7.5cm）が入ったが、釣上げられた時に生じた異常ガスがとれず、翌々日死亡した。

- ◎ 20日 C水槽のヒーターが故障のため、水温が15℃に下り、タテジマキンチャクダイが死亡した。

チョウチョウウオ類の低温限界はもっと低いはずであるが、この魚は先月入槽以来ほとんど摂餌せず、衰弱していたので、温度低下に耐えられなかったのであろう。同槽のハタタテダイ・ツノダシ等には異常がなかった。

- ◎ 29日 A水槽のモンガラカワハギ（昨年 月入槽）は、腹部が異様にふくれ、狂泳して死亡。

解剖したところ、肝臓の褪色が著しく、下葉に潰瘍を生じ、それが腸に及んでいた。この内臓障害の原因は、白点病治療剤の副作用か、栄養障害か、あるいは採集時の外傷にもとづくものか不明である。

- ◎ 同日 ヒートポンプユニットのコンデンサー熱交換パイプを清掃。管内の水垢をとり除いた。このさい高温調節用のサーモスタットを点検したところ、感温管の表面が海水に侵されて穴が開き、作動していなかった。

このサーモスタットは、すぐに新品にとり替えたが、感温管の腐蝕は、ヒートポンプの運転上、重大な支障になるので、その対策をメーカーに依頼した。

- ◎ 1月の動物入手概況

1. 採集作業

日 時	採集場所	方 法	人員	主な目的動物
6 日 夜	細野・古賀浦	夜間磯採集	1	ウミサボテン
10日早朝	北浜沖暗礁	ウツボ籠	2	ウツボ
16日 夜	島島西浜	夜間磯採集	1	ウミサボテン
18日 夜	長場・南浜	〃	2	アメフラシ類
26日午後	塔島東水道	SCUBA潜水	2	ウミトサカ類
28日午後	〃	〃	3	ネンブツダイ類
31日午後	〃	素もぐり	2	ウニ類

昨秋は熱帯性魚類の来遊がとくに多かったのと、今年の暖冬のためか、例年この月には全く姿を見せないサンゴ礁魚類が近海で越冬しており、SCUBA潜水で下記の魚を採集した。

しかし、ツノダシなどは、低温致死限界に近い水温で辛うじて生存しているらしく、夏一秋の敏捷さは全く示さず、採集は極めて容易であったが、生簍の中で体の平衡を失い保温水槽へ収容してからも、9尾中5尾は回復しなかった。

主な採集動物名（☆印は1962年4月1日以降はじめての入槽）

無脊椎動物： ペニウミドサカ、ウミキノコ、ウミサボテン、コマチガラテア、☆クチムラサキダカラ、カメノコフシエラガイ、アマクサアメフラシ、イボウミウシ、クロシタナシウミウシ、ウミシダ、コアシウミシダ、マダラウニ、トックリガンガゼモドキ、アカオニガゼ、トラフナマコ。

魚類： ウツボ、☆アヤメエビス、ツماغロハタンボ、キンセンイシモチ、オオスジイシモチ、ミツボシクロスズメ、ホンソメロケベラ、シラコダイ、ツノダシ、アオサハギ、ハコフダ

2. 購入

堺浦と芳養の延縄漁師より、クロアナゴ、ウツボ類、サメ、エイ類などの大型魚類が入槽。

また雑賀崎一本釣漁師からの入槽も、例年より多かった。

主な購入動物名

無脊椎動物： アカエビ、オオカイカムリ、ベニツケガニ、ボウシュウボラ。

魚類： カスザメ、マダラエイ（体長120cm、45kg）、ヒメ、アカエソ、クロアナゴ、トラウツボ、サビウツボ、アカヤガラ、シロアマダイ、チカメキントキ、クルマダイ、ホウキハタ、☆トビハタ、ムツ、サクラダイ、ヨコスジフエダイ、オキトラギス、イラ、テンスモドキ、サバフグ。

◎ 飼育概況

先月中旬より始めたD・H両水槽の温水循環は、その後順調で、20~23℃の水温を維持しているので、今月より新たにA・Bの2槽（これまで、投込ヒーターにより保温）を循環系に加えた。

白点病はT-4、T-6、C、J、の各槽に発生したが、慢性化したJ水槽の魚類をのぞき、初期治療ができた。

J水槽は保温できないため、開放式給水中で、低温のため、病原虫の活動は止まっているが、一方、薬剤の効果も期待できない。

1月31日現在、飼育中の動物は、総計508種3604個体以上で、その内訳は次の通り。

このうち、観覧水槽に飼育、展示中の動物は490種3560個体以上。

カイメン類 2種 3個体	ゴカイ類 5種 11個体	イカ類 2種 3個体
ヒドロ虫類 2" 17 "	カブトガニ類 1" 2 "	タコ類 3" 11 "
ハチクラゲ類 一" 一 "	フジボ カメノデ類 3" 23 "	ウミシダ類 5" 20 "
ウミトサカ類 7" 31 "	エビ類 16" 222 "	ヒトデ類 8" 99 "
ヤギ類 8" 55 "	シヤコ類 2" 3 "	クモヒトデ類 4" 6 "
ウミエラ類 2" 7 "	ヤドカリ類 14" 155 "	ウニ類 18" 134 "
イソギンチャク類 8" 100 "	カニ類 40" 207 "	ナマコ類 7" 39 "
イシサンゴ類 15" 78 "	アメフラシ類 6" 24 "	ホヤ類 5" 53 "
ツノサンゴ類 2" 4 "	二枚貝類 15" 348 "	軟骨魚類 9" 48 "
ハナギンチャク類 1" 15 "	巻貝類 45" 490 "	硬骨魚類 250 1356 "
ホウキムシ類 一" 一 "	ヒザラガイ類 1" 7 "	カメ類 3" 29 "

資 料

1月の気象（午前9時観測）

才1水槽室（水温・比重は1/6.24水槽）

	上 旬	中 旬	下 旬
晴天日数：24	9	7	8
室温（℃）	$\frac{9.4 \sim 14.3}{11.6}$	$\frac{8.1 \sim 13.2}{10.4}$	$\frac{9.0 \sim 12.4}{11.1}$
水温（℃）	$\frac{14.30 \sim 17.20}{15.26}$	$\frac{14.60 \sim 15.72}{15.11}$	$\frac{13.50 \sim 16.00}{14.86}$
比重（15℃）	$\frac{25.11 \sim 26.32}{25.69}$	$\frac{25.39 \sim 25.99}{25.69}$	$\frac{25.58 \sim 25.86}{25.76}$

才3水槽室（水温）

H水槽（℃）	$\frac{21.7 \sim 22.7}{22.1}$	$\frac{21.1 \sim 22.6}{21.8}$	$\frac{20.8 \sim 22.0}{21.4}$
T-8水槽（℃）	$\frac{15.1 \sim 18.0}{16.3}$	$\frac{14.9 \sim 16.2}{15.3}$	$\frac{14.0 \sim 15.7}{15.1}$

海水取入口

水温 (°C)	<u>14.60~17.46</u> 16.51	<u>14.60~17.00</u> 15.71	<u>14.00~15.72</u> 15.04
比重 (15°C)	<u>25.15~25.87</u> 25.71	<u>25.69~26.04</u> 25.86	<u>25.71~25.97</u> 25.80

昭和 4 1 年 2 月 1 5 日 (1 4 9)

編集兼発行者 市 川 衛

発行所 京都大学瀬戸臨海実験所

和歌山県西牟婁郡白浜町

電話 (白 浜) 2 0 4 7 . 3 5 1 5